

女子学生とその両親が捉えた性格の相互認知

——似より感とズレ感をもとにした分析——

秋 山 幹 男

On Mutual Cognition of Female Students and their Parents Personalities

——An analysis based on similarity and discrepancy——

Mikio Akiyama

エリクソン (Erikson, E.H.) は、アメリカに移住した時、知人の紹介で2つのインディアン居留地に入り、親子の関係を観察したり面接をする機会に恵まれた。彼は、尊敬する心の父であるフロイト (Freud, S.) の「同一視 identification」でインディアンの子育てを解釈しようとしたが、この概念だけではうまく処理できなかった。そこで今はあまりにも有名になった「同一性 identity」を用いたと言われている (梶田 1998)。また、彼のデビュー作である「幼児期と社会 CHILDHOOD AND SOCIETY」(1950) のまとめの終わり部分で、発達段階ⅠからⅧにそって記述するのではなく、最初は発達段階Ⅶの生殖性対停滞から出発する予定だったことに触れていた。

そこで、「親子の似より」の現状とそのパースペクティブ」(1994) をまとめ上げる折りには、ここに注目して、自分なりの推論を押し進めた。その後5年の月日をかけて自分なりに納得するに到ったことをここに示してみたい。フロイトのいう「同一視」(無意識レベルでの適応機制) とエリクソンの「同一性」概念を同一線上に捉えるのではなく、その間に隙間をあけ、「親子の似より感 (ズレ感)」を位置づけてみたことはこれまでも述べてきた。長年にわたり女子学生を対象にした調査を続けてきたのだが、この概念の誕生によってその蓄積が新しい発達・臨床分野の開拓に結び付いたと言えるのである。1992年からスタートした論文化と学会発表は、その芽生えといっても過言ではあるまい。この一連の研究は、青年期の女性から壮年期の母親までを対象に、エリクソンの気付きにプラスする形で、心内化プロセス／継承化プロセスとして、1994年以来主に日本心理学会と日本性格心理学会で発表を続けている。

心内化プロセスは、どのような形で心の内に留まっていくのか (記憶されるのか) を狙っているのだが、これにはたくさんの女子学生のデータがある。また、継承化プロセスの方は、女子学生をもつ母親が、実父母との似より感と「夫-自分-娘」の似より感をどのように関係づけているかについて学会発表を始めている (1998a, b, 1999)。一方、幼児をもつ若い母親の実父母との似より感がどのように養育態度に影響を与えているのか、また、子どもの性格と自己のそれとがどのように絡まって認知されているのかについては、すべての処理が完了し、学会発表も済んでいる (1996, 1997a, b)。

発達心理学の視点に立って「同一視」概念を捉えた場合でも、この心のメカニズムはやはり無意識次元の中で一生働き続けるといえるものであろう。しかし、同一視という心の働きだけで我々はこの世に存在しているのではあるまい。人生を発達の観点からみたとき、「ひと」は己を意識するようになる。現象としてその発達をみていくと、随分と昔から第一反抗期／第二

反抗期という捉え方や理解がなされてきた。幼児期も二・三歳頃になると自我が芽生えるし、思春期ではさらに激しい意識レベルでの親子の葛藤が生じる。特に後者の時期においては、親に対する憎悪や嫌悪感がものすごく増幅する若者は決して少なくはないのである。ところが、誠に不思議なことなのだが、歳を重ねさらに自己発達の歩みを進めていくなれば、中山（1972）のデータのように「欠点はあるが尊敬できる」という若い成人に変化する（8割強）。そして、早かれ遅かれ、大多数の人が結婚し、新しい家庭・家族を二人のオリジナルで形成していく。娘が結婚する時、日本では父親にお礼の手紙を書く風習が残っており、そこには真心を込めた感謝の言葉が記されている。それは、披露宴に出席した人々の心を強く打つほどのものである。あんなに一時は対峙関係にあったのにもかかわらずである。

「親子の似より感とズレ感」は、『似よることとズレること』というもう一回り大きい包括的な人間関係の受け止め方を背負っている対概念である。自分にとって外部の他者が、significant other 化してくると〈私〉の中に取り込まれていく（西平，1986）。それはその後「私と内なる他者」となり、歳を重ねるにつれ、〈私＝内なる他者〉化し、ついには《私》の中に融合していくと筆者は考えている。このことは、フロイトの概念だけでも解釈できそうだが（これにその他の無意識的な適応機制も加味することによっても），“では、どうして人は若い時に親と対峙するのだろうか”という発達上の問題が未解決のまま残るように思う。そこで、意識・無意識レベルの両方にまたがってもいい「親子の似より感」という概念を用いたいのである。このようにこの概念は、無意識レベルでの「似より」をも取り込んだ概念なのである。意識レベルに浮上した親と自己の対比は、発達のみると、大きな意味が存在する。これは、似よる方向での自己（私）の人格形成、言い換えれば、心内化プロセスである。では、エリクソンがアメリカ・インディアン母子／父子の関係を説明しようとする時、なぜ尊敬するフロイトの「同一視」だけでは不可能だったのだろうか。今のところ、詳しいことは分からない。だが、人生8つの発達段階には各々発達の課題／危機があるという彼の捉え方は、とても魅力的である。対概念をもとにした比率的な雰囲気があるそこには存在するからである。各段階の危機を乗り越えるということは、発達課題の比率が危機のそれを上回るということである。彼のいう第V期まで人生を進めてきた学生（一連の調査研究は一貫して女子学生）にとって、心内化プロセスには、似より感「大」群の学生と似より感「小」群のそれとの間に、大きな自己認知上の差が存在することが分かってきている（1988，1992ab，1995ab，1997，1999）。

エリクソンの「同一性」概念には、必然的に親と（または、大切な人と）ズレていくプロセスも存在する。そこでは、親子のズレも生じてくるだろうし、似より感はズレを伴いながら他の significant others へも波及し、それは内なる他者化し、ついには《私》に融合していく。このように、「似より感」はその対をなす「ズレ感」との相即不離の関係性を保持するのである。親子の似よる方向をたどっていくと、そのスタートは「同一視」というメカニズムと結び付き、親子のズレる方向へと視点を移していくと、そこには「同一性」の感じという自己の新しい連続性（continuity）と不変性（sameness）の感じの把握がある。つまりは、他者に対する自己の意味の不変性と連続性に合致する体験から生まれた“自信”ということである（Erikson, 1959 小此木訳編，1973）。この感じの山場は、エリクソンのいう第V期つまり青年期なのである。

「同一視」と「同一性」の間をずらし、隙間をあけて、そこに「親子の似より感（ズレ感）」を位置づけるという考え方は、今のところここまで到達してきている。

最近になってこの考え方のルーツに気付いた。それは、32年前の修士論文（1968）の中にある。その抄録には、Solomon, R.L. ら（1953a, b, 1954）の研究のことが記されて

ある。彼らは、被験体である犬に強力な電気ショックを与え、回避反応（CR）を覚えさせた。犬達は、強い不安／恐怖にさらされ、少ない試行の繰り返しの中で、その形成されたCRは消し去ることがとても難しくなる。そしてとうとうトラウマ化していったのである。その後ソロモンたちは、このCRを何とか消去させようと種々の方法を試みた。この研究は人間を被験者としてもさらに続行された。

これら一連の行動を解釈するために彼らは「二過程説」の立場を取り、不安／恐怖といった情動が、「0」にならないとCRは消失しないと考えた。筆者は当時、シロネズミを被験体にして、中程度（0.5ma 520V）の電気ショックで回避反応の習得と消去操作・消去のプロセスを調べていた。操作を加えた後の消去期に見せた彼らの反応は驚くほど様々であった。そこでみられたたくさんの行動現象の推移から、ソロモンたちの二過程説に修正を加え、情動生起の図にCR生起閾値なる線を書き入れたのである（Fig. 1）。その後1969年には毎日10試行を10日間、1973年には1日集中100試行にわたって消去期の推移を詳しく追跡した。どうもこの閾値という自分なりの受け止め方が、30年以上たった今、親子の似より感（ズレ感）と結び付いたように感じとっている。

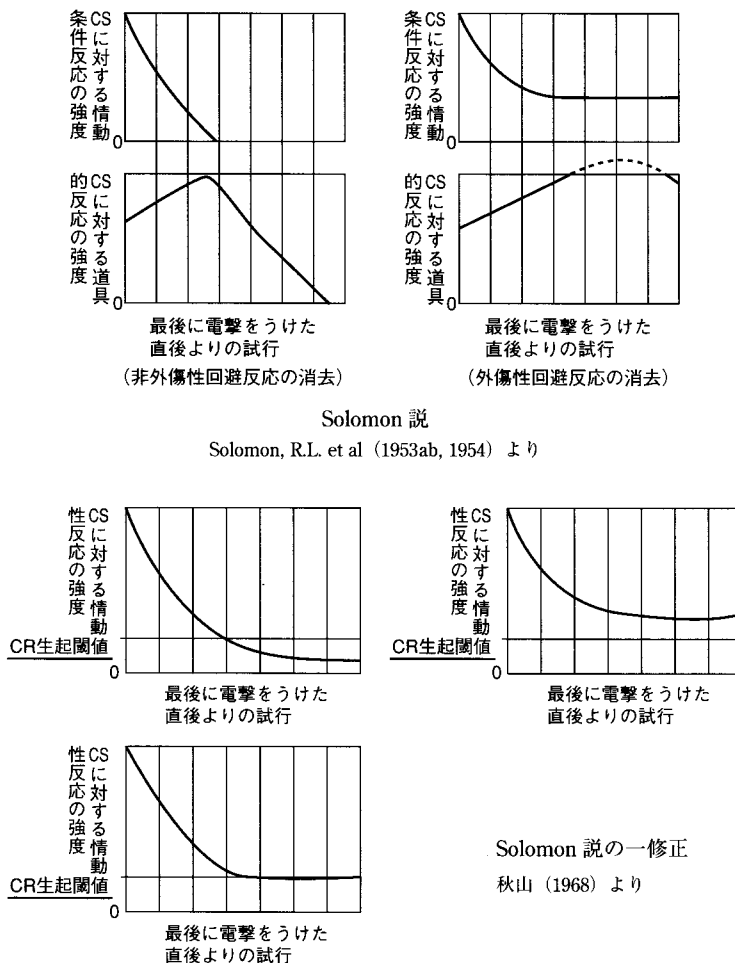


Fig. 1 Solomon 説をベースにした情動反応における CR 生起閾値の導入

今回まとめた研究の調査は、何と 15 年前まで遡るものである。当時ももてる力を総動員し、3 回の学会発表をしたのだが、その成果には今一つ満足できないものがあった (1981, 1982, 1987)。その後も多くの調査を続行したためここまで論文文化は保留扱いとなってしまった。何といても 1980 年と 1984 年に女子学生とその両親から得られたデータは、大変貴重なものの一つである。一貫して娘と母親の性格認知を親子の似より感で追究してきているので、父親からのものはこの時のものしか手にしていないのである。昨年日本性格心理学会での論文集には、“現在は母親の実父母との似より感しか分析できないけれど、父親の実父母とのそれが手に入れば、娘の両親との性格認知と絡ますことで家族の雰囲気が浮かび上がる”ことに触れた。今回分析・検討を試みたデータだけでは親の実父母との似より感を捉えることはできないけれども、そこに到る道筋は見えてくる。

「待つ」つまり“期が熟する”ということも、大切な要因の一つであるということが分かってきた。似より感の群分けの仕方を決めるために 20 年の歳月をかけてきた (七区分表示法の創設は 1974 年で、とても早かったのだが、まだ完成したものとは言いきれない)。図・表化の課題も、1997 年に考案されたスクウェア・グラフでもって新しい分析・図示の道が開けてきている。これに「面での分析法」(1999 年より使用開始)を取り入れたため、今やっとこれらの群の抽出法と図の表示法が絡み合いつつ、一つの形態を取り始めている。

論文としては手付かずだったこの親子三者間の性格の相互認知は、もっと回収数は多かったのであるが、3 人のデータが揃ったのは 83 組であった。学会発表以来 10 数年寝かせてきたおかげで、これまで追究してきたことも踏まえて眺めた時、興味深くまた面白い結果がすでに得られていたことに気付いた。

本研究の目的は、83 組の娘・母親・父親から得られたデータを絡ませながら、発達臨床学的見地より、似より感大群と小群の比較検討を試みることにある (平均値での分析と相関を基にしたクロスの分析)。

方 法

対象者 本学文学部 2 年生「娘」122 名、彼女の「母親」94 名、「父親」93 名から調査用紙への回答があった。今回は、親子 3 人のデータが揃った 83 組を取り上げた。「娘」は、19 歳から 20 歳。「母親」の年齢は、40 歳代 49 名 (59.0%) 50 歳代 20 名 (24.1%) 不明 14 名。「父親」の年齢は、40 歳代 29 名 (34.9%) 50 歳代 42 名 (50.6%) 60 歳代 3 名 (3.6%) 不明 9 名であった。学生のきょうだい数は、一人っ子 18 名 (21.7%：無記入者も含まれている可能性大)、2 人きょうだい 31 名 (37.4%：第一子 21, 第二子 10)、3 人きょうだい 20 名 (24.1%：第一子 9, 第二子 6, 第三子 5)、4 人きょうだい以上 3 名、不明 11 名という構成であった。

実施期日と方法 「娘」については、1980 年 7 月 4 日/1984 年 6 月 22 日の青年心理学の時間に実施した。「母親」と「父親」については、依頼状を付け封筒に入れてその年の 7 月に学生に持ち帰ってもらい、9 月に回収させてもらった。評定は 5 段階尺度である。

調査用紙の内容 尺度評定法による性格調査 学生とその両親にお互いの性格について評定してもらう。56 項目は、1985 年に広島大学の大型コンピュータで抽出された 4 つの人格認知因子 42 項目とその他 14 項目からなっている。娘からみた「自分-母親-父親」という 3 人の評定対象のデータをもとにして処理がなされた。評定者 (279) × 評定対象 (3) の 837 をサンプルとして、評定値に関する 56 × 56 の項目間の相関行列を求め、これを入力データとして主因子解法により 4 つの因子を抽出し、つぎにバリマックス法により直交回転を行い、単純構造に変換

しなおした。第4因子までの寄与率は全分散の40.7%であった。4因子の命名と項目内容／その他の項目内容は、次のごとくである。なお（ ）内の数値は各因子に関する因子負荷量である。

F1 内向性 (12 項目)：しよげやすい (.668) おく病な (.649) 感傷的な (.616) 意志の弱い (.614) 甘えた (.585) ロマンチックな (.557) 行動力のある (-.537) 他人を気にする (.528) 指導力のある (-.514) スケールの大きな (-.492) 内気な (.490) 服従的な (.458)

F2 自己顕示性 (9 項目)：利己的・自己中心的な (.670) 支配欲の強い (.639) 強がり (.598) うぬぼれの強い (.593) わがままな (.545) ひねくれた (.523) 頑固な (.507) 虚栄心の強い (.471) 粗暴な (.459)

F3 誠実性 (14 項目)：礼儀正しい (.587) ねばり強い (.554) 几帳面な (.544) ひたむきな (.522) ものを深く考える (.515) 包容力のある (.476) 正義感の強い (.464) 献身的な (.449) 親切的な (.446) やさしい (.446) なげやりなところのある (-.427) 無責任な (-.419) あきっぱい (-.407) 調和のとれた (.402)

F4 明朗性 (7 項目)：明るい (.675) ユーモアのある (.651) 友人の多い (.593) さっぱりした (.510) 冒険好きな (.467) 未来に大きな希望をもつ (.424) 孤独な (-.422)

その他 (14 項目)：しつと深い (F1 .524, F2 .412) 不安定な (F1 .473, F2 .406)／神経質な、疑い深い、理想主義的な、ヒステリックな、趣味の広い、生き甲斐を感じず、素直な、ニヒルな、体の強い、独立心の強い、宗教的な、古いものの考え方をする

データの処理 ① 評定者である「娘」「母親」と「父親」が捉えた親子の似より感2群の取り出し方は、回答されたものを三件法に置き直してなされている。“非常にそう思う”“どちらかといえばそう思う”をまとめて「はい」とし、“どちらかといえばそう思わない”と“全くそう思わない”を合わせて「いいえ」とする。「はい」「?」「いいえ」の中から「?」を除き、「はい」と「いいえ」で答えた項目数を七区分の中に入れていき、区分③における数の多少で群分けをする (Fig. 2 七区分表示図参照)。

② 「娘」のみた評定対象「自分-母親-父親」, 「母親」の捉えた「娘-自分-夫」と「父親」の「娘-妻-自分」について、各々の因子別得点 (F1～F4) を取り出す。ここでは、5件法をそのまま生かし (得点5～1), 各因子ごとに加算する。但し、性格項目の因子負荷にマイナスがついている項目は、6-×変換をおこなう。その合計点を因子を構成する個数で割り、5.0～1.0の範囲内で得点化がなされた。

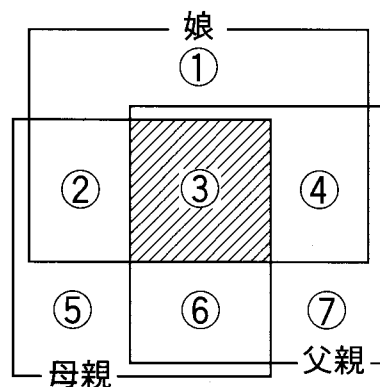


Fig. 2 七区分表示図

結果と考察

1. 三人の評定者から得られた「はい」と「いいえ」の個数をもとにした3つの分析

「せっかく5件法で回答したのに、なぜわざわざ3件法にして群分けをしなければならないのか」と疑問に感じた人はかなりいた。しかしながら、このように簡便化した上で群を作り、その差をみていくという方法は、これまでの一連の研究結果からこれまでは明らかにされてこな

かった新しい分野を開拓しつつあるということは確かなように思う。Tab. 1-1 は、三人の評定者が3つの評定対象に対して「はい」と「いいえ」で回答した個数の平均と SD である。ついで、Tab. 1-2 は、Fig. 2 の七区分表示法により分類された三人の評定者ごとの出現個数（項目の数）である。この7つの区分のうち、区分③に入った個数をもとにして似より感の群は取り出される。今回は、3群に分けることをせず、大群と小群の2群分けとした。これまでの発表では、大・中・小の3群に固執したため、群の人数も少なくなり統計的にも煩雑になりすぎ、うまく相互の差を説明できにくかった。評定者の「娘」「母親」と「父親」における2群の区分③の出現項目数の幅は、Tab. 1-3 の通りである。

Tab. 1-1 「はい」と「いいえ」の個数

評定対象 評定者	娘	母親	父親
「娘」 \bar{X} (SD)	40.2 (8.5)	40.9 (9.6)	41.4 (9.0)
「母親」 \bar{X} (SD)	46.0 (9.0)	45.0 (9.1)	47.4 (7.6)
「父親」 \bar{X} (SD)	43.3 (10.2)	45.1 (8.6)	44.4 (8.7)

Tab. 1-2 七区分ごとに見た項目数の平均と SD

区分 評定者	1	2	③	4	5	6	7
「娘」 \bar{X} (SD)	12.5 (5.7)	7.1 (4.0)	13.8 (8.9)	6.9 (4.7)	10.4 (5.7)	9.6 (5.0)	11.1 (6.3)
「母親」 \bar{X} (SD)	8.5 (4.9)	8.6 (5.0)	19.6 (9.1)	9.2 (4.3)	9.6 (5.1)	7.2 (4.3)	11.4 (5.5)
「父親」 \bar{X} (SD)	7.7 (4.5)	8.8 (5.0)	19.2 (10.4)	7.5 (4.8)	10.2 (5.5)	6.9 (4.3)	10.8 (5.2)

83組のデータは、そのまま三者ばらばらに検討するのではなく、Tab. 1-4 のように三人の評定者の2群を組合せて、新しい分析の群を取り出すことにした。表をみると、大大大に22名、小小小に24名が収まり、この2つで全体の55.4%を占めている。「娘」だけの大と小の人数をみると、40人と43人でほぼ半数になっている。今回の分析は、この2つの組合せで群を構成し、検討を加えていくことにする。

Tab. 1-3 区分③をもとにした群分け
(コ)

群 評定者	大群	小群
「娘」	35 - 13	12 - 0
「母親」	44 - 20	19 - 2
「父親」	48 - 18	17 - 2

Tab. 1-4 3人の評定者の大群・小群を組み合わせる

「娘」	「母親」	「父親」	n	%	
大	大	大	22	26.5	→ 大大大群
		小	7	8.4	
	小	大	4	4.8	娘大群 N = 40
		小	7	8.4	
小	大	大	7	8.4	娘小群 N = 43
		小	4	4.8	
	小	大	8	9.6	→ 小小小群
		小	24	28.9	

2. 平均と標準偏差を使った比較

1997年に考案したスクウェア・グラフを用いて、評定者3×評定対象3の9つの図示を試みたのがFig.3である。ここでは、「娘」と「母親」「父親」を組み合わせ抽出された大大群と小小群の結果を取り上げており、娘大群と娘小群での比較はこれに付記する形で紹介していきたい。

2群(R)と3人の評定者が捉えた評定対象(C)について、因子別得点ごとに完全2要因分散分析を行った(篠原, 1984)。12の分析の内、8つで行間(R)と列間(C)共に有意差がでた。(→娘)のF4, (→母親)のF2, (→父親)のF4は群間のみ有意差があった。また, (→父親)のF1では群間には差がでず, 列間(C)のみ有意な差がみられた。完全2要因分散分析で差の得たものに対して, 多重比較(テューキ法)を行った($P<0.05$)。

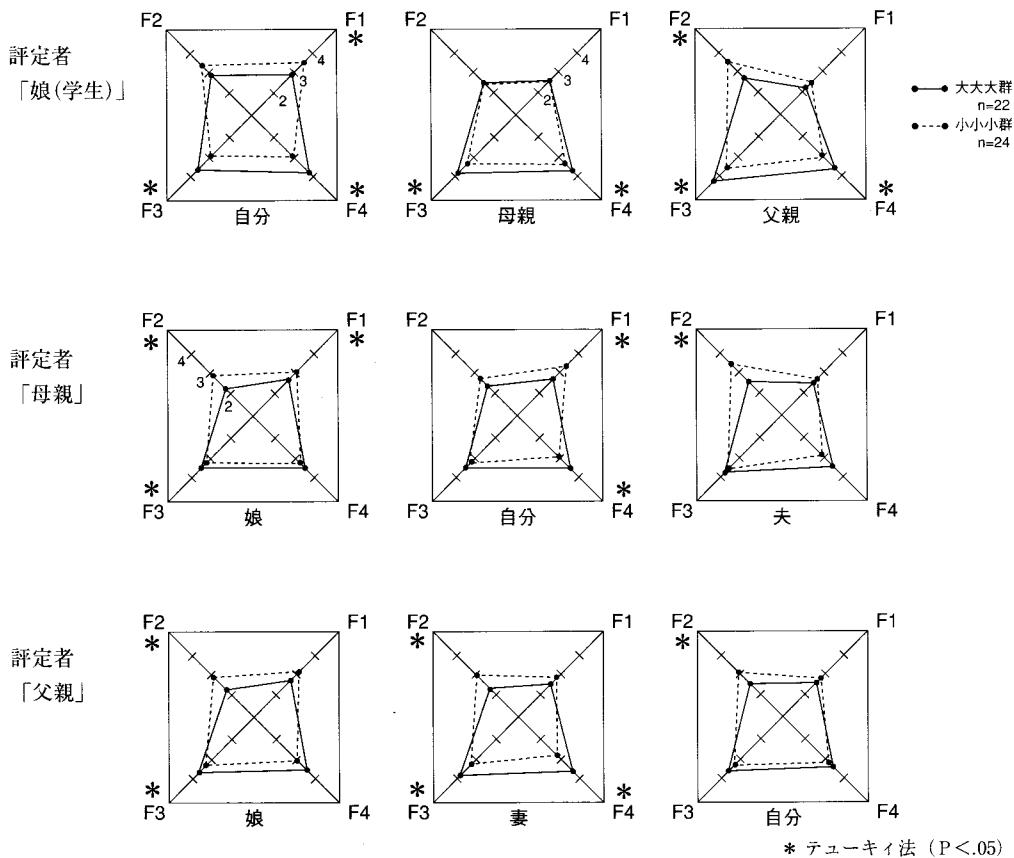


Fig. 3 スクウェア・グラフをもちいた群間の比較

このFig.3は、F1～F4をスクウェア・グラフ化して評定者と評定対象の関係をみたものである。大大群(n=22)と小小群(n=24)の平均因子別得点は、図内のグラフで示してある。多重比較からまず読み取れたのは、「娘」→自分, 「母親」→娘, 「父親」→娘のF3誠実性において群間に有意な差がでた。ついで, 「娘」→母親, 「母親」→自分, 「父親」→妻のF4明朗性において, 「娘」→父親, 「母親」→夫, 「父親」→自分のF2自己顕示性で群間に差がみられている。つ

まり評定対象（娘）では F3 誠実性，評定対象（母親）では F4 明朗性，評定対象（父親）では F2 自己顕示性が，大大大群と小小小群認知（判断）の決め手になっているのである。

評定者から3つの評定対象を眺めた場合，「娘（大学生）」においては F3 と F4 で2群間のすべてにおいて差をみせているのに対し，「母親」ではそれがみられず F1 が娘と自分，F2 は娘と夫の間でのみ差がでている。「父親」の認知ではやはり F2 の判断が大きなポイントになっている。F3 については，娘と妻の二者の認知で有意な差をだしている。これを表に示し，娘大群と娘小群の結果と見比べやすくしたのが Tab. 2 である。群の構成員を絞りこんでいくことで，そこに現れてくる認知差がどのようなものなのかは，増になる因子を見ることにより明らかとなる。

Tab. 2 2群の比較で有意差のたもの

因子	評定者でみる			評定対象でみる		
	「娘」	「母親」	「父親」	娘	母親	父親
F1	1	2	0	2	1	0
F2	1	2	③	2	1	③
F3	③	1	2	③	2	1
F4	③	1	1	1	③	1
娘大群と娘小群では有意差なしの因子	父 F4	娘 F1 F2 F3 自分 F4	娘 F2 自分 F2	「母親」F1 F2 F3 「父親」F2	「母親」F4	「父親」F2 「娘」F4

註 ③とは，すべての関係で差をみたもの

3. ピアソンの相関係数による比較

ここでは，4つの因子について3つの組合せ別（娘と母親／娘と父親／母親（妻）と父親（夫））に相関関係をみている。Fig. 4-1 は，6通りの比較関係を示した図である。

なお，すべての相関値を記載するととても煩雑になるので，今回は $\pm 0.40 \sim$ の実質上の，またはいちじるしい相関（ギャレットによる）が得られたもののみを図内に示している。ただし，記載の仕方は3段（上段：全体／中段：大大大群／下段：小小小群）にしているので，どこか

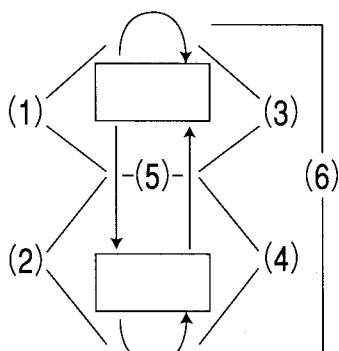


Fig. 4-1 相関算出の比較番号

1つが基準を満たした場合には他の関係の相関値が低くてもその値を記した。その結果は，Fig. 4-2 のごとくである。全体で高い相関がみられた場合，それは大大大群も小小小群もそうなのだとはいえないことが分かる。大大大群によって押し上げられたものであったり，小小小群が高くてそれが全体に影響を与えていることもある。非常に高い値をだしているのは，F2 の「母親と父親の (4)：大大大群 0.85」，F4 の「母親と父親の (3)：大大大群 0.76」，F2 の「娘と父親の (2)：大大大群 0.72」，F4 の「娘と母親の (4)：大大大群 0.69」という4つの比較であった。すべてが大大大群というのが大きな特徴といえよ

女子学生とその両親が捉えた性格の相互認知

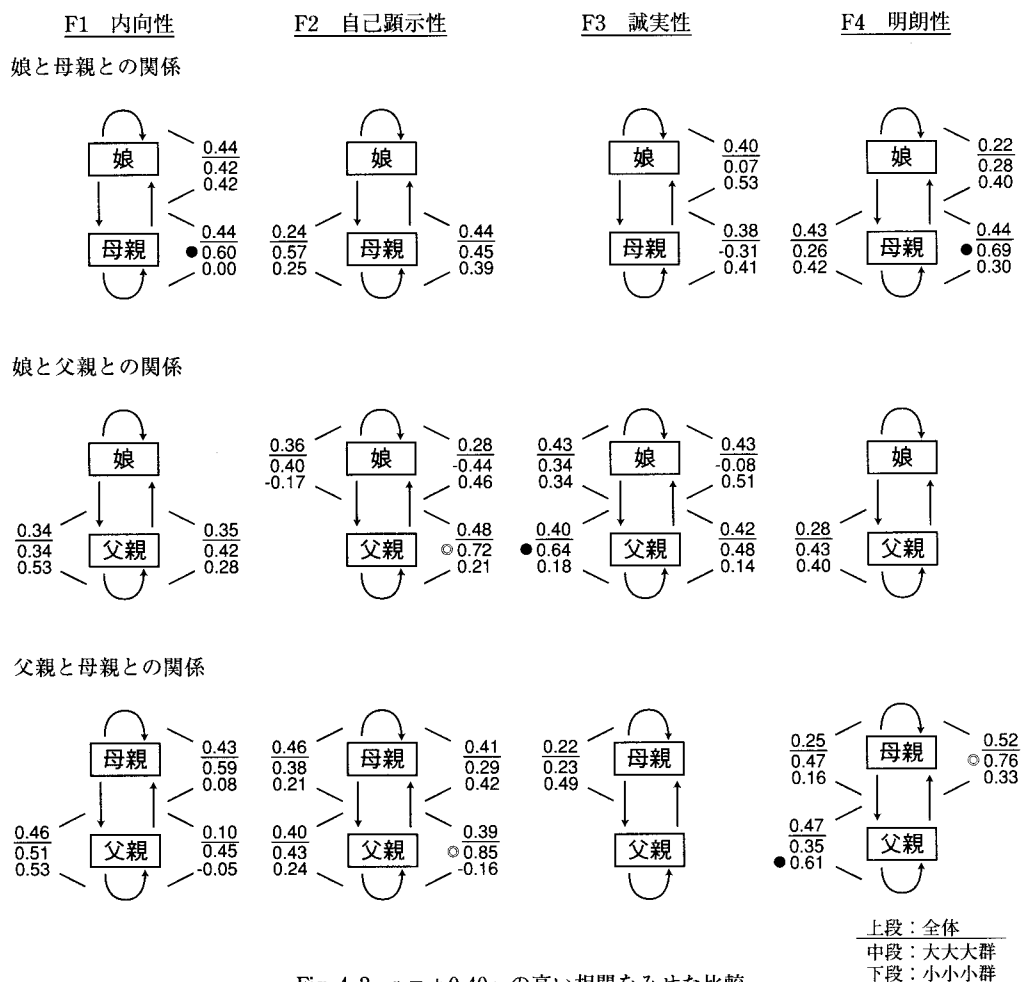


Fig. 4-2 $r = \pm 0.40$ の高い相関をみせた比較

う。Tab. 3-1 ～ Tab. 3-3 には $r = \pm 0.40$ の高い相関をみせたものを、娘と母親の関係／娘と父親の関係／母親（妻）と父親（夫）の关系到分けて示したものである。各々は、比較（1）～（4）／（5）と F1～F4 を組み合わせて表している。この一連の表から分かることをあげてみよう。

3-1. 娘と母親の関係 全体では比較（4）と（3）で高い相関がでている。この中の比較（4）は大大群と、比較（3）は小小群と対応している。因子からみると、全体では F1 と F4、大大群では F1、F2、小小群では F3 と F4 で高い相関をだしている。F2 での相関は大大群、F3 は小小群の特色となっている。

3-2. 娘と父親の関係 ここでは大大群の比較（4）が目につく。F4 を除いた 3 つの因子で高い値を出した。比較（2）では大大群と小小群にでているが、F4 のみ共通で後の一つの出方は違っている。因子でみた場合では、全体の F3 が特に目だっている。誠実性では自分をみるのと相手（ここでは父親であり娘である）とを関係づけながら評定している。大大群での特徴は、F2 ついで F3 で高い相関が得られた。

3-3. 母親と父親の関係 小小群の出方はここでも少ない。全体では比較（2）（3）、大大群でも比較（2）（3）（4）で高い相関が得られたが、特に比較（3）の F4、（4）の F2 は非常に高い

Tab. 3 $r = 0.40$ 以上の高い相関をみせたもの

Tab. 3-1 娘と母親との関係

比較	全体	大大大	小小小	因子	全体	大大大	小小小
(1)	0	0	0	F1	2	2	1
(2)	1(F4)	1(F2)	1(F4)	F2	1	2	0
(3)	2(F1・3)	1(F1)	2(F1・3)	F3	1	0	2
(4)	3(F1・2・4)	3(F1・2・4)	1(F3)	F4	2	1	2
(5)	0	0	1(F4)				

Tab. 3-2 娘と父親との関係

比較	全体	大大大	小小小	因子	全体	大大大	小小小
(1)	1(F3)	1(F2)	0	F1	0	1	1
(2)	1(F3)	2(F3・4)	2(F1・4)	F2	1	3	1
(3)	1(F3)	1(F2)	2(F2・3)	F3	4	2	1
(4)	2(F2・3)	3(F1・2・3)	0	F4	0	1	1

Tab. 3-3 母親と父親との関係

比較	全体	大大大	小小小	因子	全体	大大大	小小小
(1)	1(F2)	1(F4)	1(F3)	F1	2	3	0
(2)	3(F1・2・4)	2(F1・2)	1(F4)	F2	3	2	1
(3)	3(F1・2・4)	2(F1・4)	1(F2)	F3	0	0	1
(4)	0	2(F1・2)	0	F4	2	2	1

値をだしている。父親と母親の相互認知では、大大大群の方が小小小群よりもよくお互い同士を理解し合っているといえよう。因子からみると、F1, F2, F4において大大大群が全体の高い相関に寄与していることがよく分かる。

今回は「娘」「母親」と「父親」の三者関係について分析検討を行ったのであるが、見えてこなかったものは何だろうか。なんとなく2群の間の家庭内での雰囲気の違いは垣間見ることができた。また、これまでの蓄積をさらに肯定できる結果でもあった。このデータに両親の実父母との似より感が得られるならば、いま発表を続けている母親の実父母との似より感が、かなりな比重でもって母親の家族認知に影響をもたらししているという結果に、さらなる奥行きをもたらすことになるであろう。正直いって筆者の研究が、ここまで深まってくるとは考えてもいなかった。だからこそこの研究の流れをこれからも大切に扱っていききたいものである。心内化された親子の似より感が、継承化のプロセスにおいてはどのように作用していくのだろうか。親子の似より感の差がもたらす世代間伝達の仕方の違いを掘り起こしてみたいものである。

母親がみせる世代間伝達と父親が背負っているそれとは、夫婦としてのオリジナルな家庭・家族を作り上げていく際に、どのくらいのウエイトを占めるものなのだろうか。次なる調査研究が求められている。

これからの私に広がりをもたらすであろう導き手の考え方をまとめてみると...

親子の似より感の差異は、対人関係の土台・ベースに成りうると考えるようになってきている。心内化した親子の似より感は、その後の人との出会いに大きな影響をもたらすはずである。自分にとって大切な存在者の見極めに関わる心の働きとしてである。私と外なる significant others は内なる他者として取り込まれ、やがては《私》の中にとけ込んでいく。この蓄積が、対人関係におけるその人なりの proper distance (適切な距離) を決定していくのである。ここには『似よることとズレること』の比率の問題が介在することを考えるとき、個人個人の親子の似より感とズレ感の違いは、その原点に位置するのである。

「私と内なる他者」という考え方を教示してくれた西平 (1986) は、近年『魂』という概念を持ち込んできた。「魂のアイデンティティ」(1998) で、我々の中に流れている血のつながりとか心の伝達に触れている。「私個人のこの体の中には、少なくとも、父と母という二人の血が流れ込んでいる。しかし、その父には、父と母がいて、母にも父と母がいる。だから、祖父母を入ると四人の血が流れ込んでいることになる。さらに、その次の祖々父母まで入ると八人、四世代さかのぼると、十六人.....。順に計算していくと、十代で、二千四十六人、二十代だと、二〇九七五二人になるのだそうだ。とんでもない数の人間の「血」が、この私一個の体の中に流れ込んでいることになる。」(p. 75-76) これを受けて西平は、「一人の人間の内には、実は、人間としてのあらゆる性質の萌芽が宿っている。」とし、主人公の私と彼の対話を押し進めていく。「.....ほくらは、自分の細胞の内側に、過去幾百万人の怨念を堆積させているような気がする。」彼がそう言う時、それは、単なるレトリックを超えた真実ということになる。」この後、「生命記憶」とか「身体記憶」と話を進め、無意識的な身体に染み込んだ記憶を持ち出している。これは、さらにトランスパーソナル (個を越える) な地平に導かれ、魂のアイデンティティという視点を掲げるに至っている。

我々の心の中に流れる、血のつながりとか心の伝達に、対峙するか向き合うかで、その人格形成への影響は違ってくる。大多数の人々は、これを受け入れる方向で、自分の人格を育んでいく。親との対峙の後にくる、再度の受け入れ、融合への道のりは、青年期以後の大切な発達の課題であり、心内化されたものは次世代へと継承化されていく。「私は一体何者なのか」という課題に対し、自己意識のみを強調してきたこれまでの心理学とは違う考え方がここには存在する。西平の「魂」という概念は、地球規模でこの世界を見直す生命論的視座に基づいている (森岡, 1994)。「今このように考えている私は、死んだらどうなるのだろう」という、若い頃からの苦しい思いに対し、私の内に脈々と流れ続けている気の遠くなるような心の連鎖に思いをいたすとき、私の中に新しい「私」の受け止め方が姿を現してくる。

“アメリカインディアン部族の研究をしていくうちに、「同一視」では説明ができなくなってくる瞬間があった (Erikson)” ということを教えてくれたのは、梶田 (1998) である。自己意識の研究では名のある研究者である。彼がたどり着いたアイデンティティの捉え方を紹介してみよう。

- ①主体的な identity 段階 ②社会的な identity 段階
- ③脱 identity 段階 ④超 identity 段階

この内、①と②は心理学特に社会心理学のアプローチの対象となっているが、③や④については心理学は挑戦してきていないとみている。何かが起こって③の段階に入り、そして、自己と本然的なものとの接触へと移行するという考え方である。彼らは、社会現象としては、一種の危機の時代であるからこそ、これとの接触が大事になると受け止めている。③と④の段階は、禅の十牛図に示された第八図「人牛俱忘 にんぎゅうくぼう」第九図「返本還源 へんぽんげん」

んげん」第十図「入塵垂手 につてんすいしゅ」に該当する考え方である（横山，1987）。

この他、今の筆者にとって大切な人と概念は、早坂（1994）の「関係性」と、春日（1999）の「類似性」という概念である。後者の考え方は、自己と非自己の知覚、つまりは、刺激の質の問題に触れながら、発達臨床学の内容を奥深いものにしてきており、これからの発展が楽しみである。世の中には面白いことがあるものである。筆者が独自に命名した発達臨床学は、時を同じくしてお茶の水女子大学と九州大学の大学院でも使用されていたのである。

山中（1996）の「臨床ユング心理学入門」を読んでいて、改めて感じ直したことがある。それはユングの概念「個性化」である。無意識の意識化、そして、その統合への道程がすなわち個性化であり、即「人生」なのであるということである。

40歳代を過ぎる頃より始まる、「自分は生かされているのだ」という実感は、何の（が）なせる技なのだろうか。臨済禪の公案は、決して奇妙なことを問うているのではなく、自然の中に流れている大きな真実に、その人なりの入り方（生き方）でどう出会っていくかを示すものである。そこには、人の数だけの入り道があるともいえようか。自分の中の自己を追求し続けるならば、物理学で言う、ミクロ（素粒子）の世界とマクロ（宇宙）の世界が、同じ原理で成り立つということに行き着く。この考え方をここにもってくると、脱自己の世界にいつ入っていくかは分からないにしても、いつの日にか我々もそこに入っていくことができるということの意味しているのではあるまいか。この推論が、生命論的視座に結び付くならば、これに勝る物はないであろう。個の追求は即全体のもののなか、はたまた、全体の追求は即個の次元に立ち戻っていくもののなかだろうか。とてつもない大問題ではある。

発達のプロセスにおいては、行きつ戻りつはあるものの、親との似よりを意識して、嫌悪する時期が存在する。つまり、それは思春期における意識次元への表出化プロセスである。この意識内での心の葛藤を通しつつ、プラスの面だけでなくマイナス面をも自己の中に取り込んだり、見いだしたりしていくうちに、親だけでなく自己にとって大切な他者との出会いや反発に遭遇していく。そして、「自分は自分なのだ」という感覚をつかみ取っていくのである（青年期～若い成人期）。こうして、自分の人生を積み重ねていくうちに、「自分らしさの体得」が成されていく（成人期）。これがユングの言っている「個性化」の道なのであろう。自分の生きてきた自分らしい一つの道のりを振り返りつつ、自分らしい自己統合を築き上げていきたい。絶望より比率的には多く……。“他の人には替えられない己独自の生き方をこの世に刻みこんだ”と言いきれることを夢としながら、来るべき老年期を迎えたいものである。

哲学者である中村（1999）は、「正念場」の中で次のように述べている。「自分たちのなかに、自分のなかにおのれを異化する〈他者〉を認めない場合、自分たちの集団や、自分という存在は……いたずらに貧しくひ弱なものになるだろう。」「日本の危機は、集団の場合も個人の場合も、なによりも、おのれを異化するものを含まないままに、自己を肥大させたことの結果なのである。」（P85）心しながらこの指摘を受け入れていけるように、これからたとえ牛歩のごとき歩みであったとしても、『継続は力なり』を信じつつ研究の集大成をめざし努力を重ねていきたいと思う。私は、確かに今ここにいる。これはとても有難いことなのである。

文 献

- 秋山幹男 1968 回避反応におよぼす消去法の効果 広島大学大学院教育学研究科修士論文抄 70-74
- 秋山幹男 1969 シロネズミにおける回避反応の消去と消去法の関連について 動物心理学年報 19 1-16
- 秋山幹男 1973 全体的な場よりみた条件性回避反応の消去と消去法の意義 PBD 編「行動病理学シンポジウム」90-111 誠信書房 (PBD-International Seminar: Symposium 1/1972. 8. 16. 発表のまとめ)
- 秋山幹男 1974 女子学生における自己と父母の認知について 広島文教女子大学研究紀要 8 23-38
- 秋山幹男 1981 「父-母-娘」三者間の認知について (1) —学生(娘)からみた2種の認知タイプの比較と自己把握度— 日本心理学会第45回大会発表論文集 500
- 秋山幹男 1982 「父-母-娘」三者間の認知について (2) —娘(学生)における2種の認知タイプと両親の結果— 日本心理学会第46回大会発表予稿集 284
- 秋山幹男 1985 女子学生における自己と父母の認知について (4) —因子別得点をもちいたクラスター分析の試み— 広島文教女子大学紀要 20 57-68
- 秋山幹男 1987 女子学生とその両親からみた性格の相互認知について—娘による三者の似よりをもとにした分析— 中国四国心理学会第43回大会論文集 54
- 秋山幹男 1988 女子学生における自己と父母の認知について (5) —三者間の似よりにもとづく分析— 広島文教女子大学紀要 23 (人文・社会科学編) 83-102
- 秋山幹男 1992a 親子の「似より」と女子学生の性格との関連 広島文教女子大学紀要 27 67-88
- 秋山幹男 1992b 親子の似よりと自己受容について—女子学生における理想自己と現実自己のズレ— 広島文教教育(広島文教女子大学教育学会) 7 29-48
- 秋山幹男 1994 「親子の似より」研究の現状とそのパースペクティブ 広島文教女子大学紀要 29 145-169
- 秋山幹男 1995a 親子の似よりと家族イメージ・エゴグラム 日本性格心理学会第4回大会論文集 100-101
- 秋山幹男 1995b 親子の似よりと自己形成・自己意識 日本心理学会第59回大会発表論文集 31
- 秋山幹男 1996 母親からみた親子(幼児)の性格と養育態度 中国四国心理学会第52回大会発表論文集 73
- 秋山幹男 1997a 母親からみた親子(幼児)の性格の似よりとズレ 日本心理学会第61回大会発表論文集 73
- 秋山幹男 1997b 若い母親の実父母との似より感が親子(幼児)の性格認知に及ぼす効果 日本性格心理学会第6回大会発表論文集 37
- 秋山幹男 1997c 親子の似より(感)の推移について—女子学生を対象にした4年間— 広島文教女子大学紀要 32 149-163
- 秋山幹男 1998a 成人女性のみた夫・自分・娘の性格認知—実父母との似より感をベースにした分析— 日本性格心理学会第7回大会発表論文集 78-79
- 秋山幹男 1998b 成人女性(母親)の実父母との似より感について—女子学生をもつ母親の性格認知— 日本心理学会第62回大会発表論文集 37
- 秋山幹男 1998c 「内なる他者」を見つめる目 広島文教女子大学紀要 33 103-117
- 秋山幹男 1999a 親子の似より感と心理学的健康について 日本心理学会第63回大会発表論文集 52
- 秋山幹男 1999b 母親と娘(学生)の捉えた三者間認知—「夫・自分・娘」と「父・母・自分」の似より感を中心に— 日本性格心理学会第8回大会発表論文集
- Erikson, E.H. 1950 Childhood and Society W.W. Norton & Company, Inc. エリクソン 仁科弥生 訳 1977, 1980 幼児期と社会 I・II みすず書房
- Erikson, E.H. 1959 Psychological Issues - identity and the life cycle International Univ. Press, Inc. エリクソン 小此木啓吾 訳編 1973 自我同一性 誠信書房
- 篠原弘章 1984 行動科学のBASIC 第1巻 統計解析/第2巻 実験計画法 ナカニシヤ出版
- 早坂次郎 1994 〈関係性〉の人間学 川島書店
- 春日 喬 1999 刺激の質と生体反応 お茶の水女子大学人文科学紀要 52 169-184
- 梶田叡一 1998 意識としての自己 金子書房
- 中山康子 1972 子どもの親に対する見方の変化の発達的研究(卒論) 今泉信人・南博文(編) 1991 人生周期の中の青年心理学 北大路書房
- 西平 直 1986 〈私〉をどう理解するか—H. ワロンの〈内なる他者〉を手掛かりにして— 東京大学教育学部紀要 26 197-205

- 西平 直 1998 魂のアイデンティティ 金子書房
中村雄二郎 1999 正念場 岩波書店
森岡正博 1994 生命観を問いなおす 筑摩書房
Solomon, R.L. & Wynne, L.C. Traumatic avoidance learning: acquisition in normal dogs Psychological Monographs 1953a 67 (4 whole No.354)
Solomon, R.L., Kamin, L.J. & Wynne, L.C. 1953b Traumatic avoidance learning: the outcomes of several extinction procedure with dogs J. of Abnormal and Social Psychology 48 291-307
Solomon, R.L. & Wynne, L.C. 1954 Traumatic avoidance learning: the principles of anxiety conservation and partial irreversibility Psychological Review 61 353-385
山中康裕 1996 臨床ユング心理学入門 PHP 研究所
横山紘一 1987 十牛図の世界 講談社

—平成 11 年 10 月 4 日 受理—